

<特集「他動性」>

スンバワ語の他動性 Transitivity in Sumbawa

塩原 朝子
Asako Shiohara

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿では『語学研究所論集』第 19 号の特集「他動性」のために作成された質問票に含まれている調査例文に対応するスンバワ語の文例を提供する。

Abstract: This article provides example sentences of Sumbawa corresponding to the questionnaire for eliciting data on transitivity included in *Journal of the Institute of Language Research* No.19.

DOI: <https://doi.org/10.15026/0002000402>

キーワード: インドネシア, スンバワ語, 他動性

Keywords: Indonesia, Sumbawa, transitivity

1. はじめに

本稿では高垣(2014)にある「他動性」に関する調査例文に対応するスンバワ語の文例を提供する。これは『語学研究所論集』第 19 号 (2014) の特集のために作成された質問票である。この特集の詳細については風間(2014)を参照されたい。第 2 節で他動性に関わる構文の概略を、第 3 節で質問票に沿った文例を提供する。特集アンケートでの例文番号はすみつきかっこ【 】に入れて示す。

スンバワ語はインドネシア共和国のスンバワ島の西部で話されている言語である。系統的にはオーストロネシア語族、マレー=ポリネシア語派、バリ=ササクグループに属する。Eberhard, Simons, and Fennig (2022)は 1990 年のデータに基づいてスンバワ語の話者を 30 万人と見積もっている¹。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ 塩原(2023)でも述べたように、2022 年時点の話者は 30 万人を超えていると考えられる。スンバワ語が話されている地域は行政的にはインドネシア西部南西諸島州 (Provinsi Nusa Tenggara Barat) 中のスンバワ県 (2020 年時点での人口約 51 万人) と西スンバワ県 (同約 14 万人) である。この二つの県ではスンバワ語を話すスンバワ人が 80 パーセント程度を占めていると推定されること、また現在のところ言語の次世代への継承も行われていることから、この言語の話者は少なく見積もっても 40 万人程度はいると考えられる。

以下に示す文例はスンバワ県 Pungka 村に居住する Dedy Mulyadi 氏（1975 年生まれ）への聞き取りにより得たものである。同氏はスンバワ県東部の Empang 町の生まれであるが、1990 年に県都である Sumbawa Besar 市に移り、その後配偶者の出身地である Pungka 村に移った。この三つの地域はいずれもスンバワ語の中心的方言である Sumbawa Besar 方言に属する。（スンバワ語の方言については Mahsun (1999) とそれに基づいた Shiohara (2013) における記述を参照されたい。）

2. 他動性に関わる構文の概略

2.1 スンバワ語の他動詞構文と自動詞構文

例文(1)a-c はいずれも「私はそのコーヒーを飲んだ」という意味を表す他動詞文である。スンバワ語の典型的な他動詞構文には例文(1)a のように述部が節の最初に現れるものと、例文(1)b, (1)c のように名詞句が節の最初に現れるものがある。例文(1)b では動作の対象を表す語が、例文(1)c では動作の主体を表す語が述部の前に現れている。動作主を表す要素は述部の後に現れる場合は(1)ab のように前置詞 *lij* に導かれて現れ、述部の前に現れる場合は(1)c のように形態的に無標の形で現れる。動作の対象を表す要素は常に形態的に無標の形で現れる。（スンバワ語の他動詞構文、自動詞構文についてのより詳しい記述は Reister & Shiohara (2018), Arka & Shiohara (2024) を参照されたい。）

(1) 「私はそのコーヒーを飲んだ」

- a. *ka=ku=inum kawa nan lij aku*
PST=1SG=drink coffee that by 1SG (Reister & Shiohara 2018: 288)
- b. *kawa nan ka=ku=inum lij aku*
coffee that PST=1SG=drink by 1SG (Reister & Shiohara 2018: 289)
- c. *aku ka=inum kawa nan*
1SG PST=drink coffee that (Reister & Shiohara 2018: 288)

動作主がどのような人称・数であっても同様の他動詞の構文パターンが現れる。(2)a-c はいずれも三人称単数の指示対象「アミンがそのコーヒーを飲んだ」という意味を表す。

(2) 「アミンはそのコーヒーを飲んだ」

- a. *ka=ya=inum kawa nan lij ja Amin*
PST=3=drink coffee that by title Amin (Reister & Shiohara 2018: 288)
- b. *kawa nan ka=ya=inum lij ja Amin*
coffee that PST=3=drink by title Amin (Reister & Shiohara 2018: 289)
- c. *ja Amin ka=inum kawa nan*
title Amin PST=drink coffee that (Reister & Shiohara 2018: 289)

述部には動作主の人称と数を表すクリティックが付く。ただし、(1)c のように動作主が述部の前に現れる場合は、クリティックは現れない。動作主を表す補語は述部の後に現れる。

複数の他動詞構文からの構文の選択は、談話的要因によって決まる。例文(1)(2)a のように述部が先行

する構文は無標の構文であり, 述部焦点, 項焦点, 文焦点いずれの条件においても用いられる(塩原 2023). (1)(2)bc のように名詞句が先行する文は先行する名詞句の指示物が談話の主題である場合に用いられる.

他動詞構文と自動詞構文の違いは, 自動詞構文では唯一項が常に無標の形の名詞句で現れるという点, 加えて唯一項の人称・数は, それが 1 人称・2 人称である場合にのみクリティックにより標示される。この際, クリティックと独立した名詞句は共起しない。

(3) 「私は転んだ。」

ka=ku=teri

PST=1SG=fall (Reister & Shiohara 2018: 286)

(4) 「その子どもは転んだ。」

ka=teri tode nan

PST=fall child that (Reister & Shiohara 2018: 288)

自動詞構文における唯一項以外の関与者はその意味関係を示す前置詞句によって表される。例文(5)では移動の方向が前置詞 *ko* の句によって表されている。

(5) 「私は家に入る。」

ku=tama ko bale.

1SG=enter to house

第 3 節に示す他動詞文の例文は(1)(2)a-c のいずれかの文型を取っている。文型の選択は例文を収集する際に著者がコンサルタントに示したインドネシア語の文から想定されやすい談話的条件(例えば述部焦点など)に合致する文型を話者が選んだ結果である。(ほとんどは無標の構文である述部先行型であるが, 中には名詞句先行型のものもある。)いずれの場合も各文で用いられている動詞は文法的には当該の文で選択された以外の 2 つの文型のいずれにも現れうる。本稿では上記の 3 つの構文のセットをスンバワ語の他動詞文において最もデフォルトな構造, つまり他動詞の「典型構造」とみなす。(「典型構造」については風間 2013: 37 を参照されたい。)

2.2 スンバワ語の他動詞/自動詞構文と意味分類の対応

スンバワ語の他動詞構文と自動詞構文の分布を角田(1991)が提案した二項述語階層に照らして考えると, スンバワ語の典型構造が適用される意味範囲はかなり広く, 「1 直接影響」, 「2 知覚」, 「3 追及」, 「4 知識」までが専ら典型構造によって表される。(ただし例外として「1 直接影響」に当てはまる内容が自動詞 *bəlantar* 「うっかりぶつかる」で表されるケースが見つかっている。3.2 を参照されたい。)

他動詞構文と自動詞構文の分岐点は「5 感情」である。このカテゴリーの一部である「需要」は他動詞構文によって, 「好悪」は動詞によって他動詞構文, 自動詞構文の両方で表される。(自動詞構文を取る動詞の方が多い。)これ以降の階層を他動詞構文が担うことはなく, 「6 関係」は自動詞構文, 存在構文, 名詞文など様々な形で, 「7 能力」は他動詞に由来する助動詞によって表される。以上の観察はスンバワ語の他動詞構文の分布が二項述語階層によりかなりの程度説明できることを示している。

より多様な意味分類における構文を観察するため風間(2013)により追加で加えられたカテゴリーのうち, 「社会行為」・「相互」は他動詞構文によって表される。その一方「言語行動」「移動」は他動詞構文と自動詞構文の両方によって表される。「言語行動」は用いられる動詞によって現れる構文タイプが異な

り、「移動」は多くの動詞が典型構文と自動詞構文の両方を取る。感覚を表す要素は専ら自動詞構文を取るが、中には自動詞を主要部とする慣用的構文を取るものもある。(例 *panas tian* 「空腹である」, 字義通りの意味はお腹が熱い) 以上, 意味分類と構文の対応のまとめを表 1 に示した。表では左軸に意味分類を取り, それぞれが取る構文に当てはまる箇所に記号+を入れた。

表 1 風間 (2013) の意味分類とスンバワ語構文の分布

	専ら典型構文	典型構文 or 自動詞構文	その他の構文 (名 詞文, 存在文など)	専ら自動詞構文
直接影響 (3.1, 3.2)	+			
作成 (3.4)	+			
知覚 (3.3)	+			
追及 (3.5)	+			
知識 (3.6, 3.7)	+			
感情 2 需要(3.9)	+			
社会行為 (3.18)	+			
相互 (3.20)	+			
言語行動 (3.19)		+		
感情 1 好悪(3.8)		+		
感情 3 喜怒哀楽(3.10)		+		
移動 (3.15)		+		
関係 1 (3.11)			+	
関係 2 (3.12)			+	
能力 1 (3.13)			+	
能力 2 (3.14)			+	
感覚 1 (3.16)				+
感覚 2 (3.17)				+

意味カテゴリーのうち 3.1 に例文を挙げた直接影響 (変化あり) と 3.17 に例文を挙げた感覚 (寒暖など) は特定の形式を持つ動詞によって表されることが多い。前者は使役接辞 *sa(N)-* (*N*は語基の最初の子音と調音位置を同じくする鼻音, また *a* は弱化して *a* で現れることもある) がついた形式によって, 後者は不随意状態を表す接辞 *ka-* がついた形式によって表されることが多い。

3. 文例

3.1 直接影響・変化

2.2 に示したように変化を示す構文はすべて変化後の事態を示す語に使役接頭辞 *sa(N)-* がついた形を主動詞とする構文によって表される。

彼はその蚊を殺した。【6.1】

- (6) *ya=sa-mate lalat liŋ ja.*
 3=CAUS-die fly by 3

彼はその箱を壊した. 【6.1b】

- (7) *ya=səŋ-ancir kotak nan liŋ na.*
 3=CAUS-break box that by 3

彼はそのスープを温めた. 【6.1c】

- (8) *ya=səŋ-aŋat ai' jəmbrai nan liŋ na.*
 3=CAUS-warm water vegetable that by 3

彼はそのハエを殺したが, 死ななかった. 【6.1d】

- (9) *ka=sa-mate lalat nan liŋ na, tapi əŋka bau mate.*
 PST=CAUS-die fly that by 3 but NEG.PST can die

インドネシア語の対応する文の翻訳により上記のような作例を引き出すことはできたが, 聞き取り調査の結果, 上記の文は動作の対象である蠅がその後生き返ったという含意を持つことがわかった. つまり, 「1A 直接影響変化」を表す動詞は必ず変化を含意するということになる. その含意を明示した文を(9)'に示す.

彼はそのハエを殺したが, 死ななかった. そのハエは生き返った.

- (9)' *ka=sa-mate lalat nan liŋ na, tapi əŋka bau mate.*
 PST=CAUS-die fly that by 3 but NEG.PST can die

lalat nan təlas kəbali'.
 fly that alive again

3.2 直接影響・無変化

彼はそのボールを蹴った. 【6.2a】

- (10) *ka=səpak bal nan liŋ na.*
 PST=kick ball that by 3

彼は弟の足を蹴った. 【6.2b】

- (11) *ka=səpak nɛ adi səlaki liŋ na.*
 PST=kick foot younger.sibling male by 3

彼はその人にぶつかった (故意に). 【6.2c】

- (12) *ka=lantar tau nan liŋ na.*
 PST=hit person that by 3

彼はその人にぶつかった (うっかり). 【6.2d】

- (13) *bəlantar ke' tau nan na.*
 hit with person that 3

3.3 知覚 2A vs. 2B (受動知覚と能動知覚 風間 2013:45)

あそこに人が数人見える。【6.3a】

(14)a. *ku=gita'* *pida-pida* *tau* *ada* *paŋ* *ana*.
 1SG=see RDP~how.many person exist at over.there

(14)b. *ku=gita'* *pəno'* *tau* *paŋ* *ana*.
 1SG=see many person at over.there

私はその家を見た。【6.3b】

(15) *ku=gita'* *bale* *nan*.
 1SG=look.at house that

誰かが叫んだのが聞こえた。【6.3c】

(16) *ku=mənoŋ'* *ada* *tau* *de* *kəsɛrak*.
 1SG=hear exist person REL scream

彼はその音を聞いた。【6.3d】

(17) *ku=mənoŋ'* *səda* *nan*.
 1SG=hear sound that

質問票で「受動知覚」と「能動知覚」として区別されている内容に相当するスンバワ語の文を引き出したところ、スンバワ語話者はその区別を動作の対象の不定・定による区別であると解釈した。「受動知覚」の文(14)a, b では談話に新しい事物を導入するのに用いられる存在詞 *ada*, 数量詞 *pida-pida* 「いくつか」、数量詞 *pəno'* 「たくさん」により知覚の対象が不定であることが示されている一方で、「能動知覚」の文(15)(17)では名詞句に指示詞 *nan* 「それ」がつくことにより知覚の対象が定であることが示されている。

3.4 (知覚 2A) 発見・獲得・生産など

彼は(なくした)カギを見つけた。【6.4a】

(18) *ka=ya=tumpan'* *kunci* *de* *ka=ilaŋ* *nan* *liŋ* *ja*.
 PST=3=get key REL PST=gone that by 3

彼は椅子を作った。【6.4b】

(19) *ya=pina'* *kursi* *liŋ* *ja*.
 3=make chair by 3

3.5 追及

彼はあの船を待っている。【6.5a】

(20) *ja* *muntu* *tari* *kapal* *ana*.
 3 PRG wait ship over.there

私は彼が来るのを待っていた。【6.5b】

(21)a. *muntu ku=tari ja datay.*
 PRG 1SG=wait 3 come

(21)b. *muntu ku=tari datay ja.*
 PRG 1SG=wait come 3

彼は財布を探している。【6.5c】

(22)a. *ya=buya dompet liy ja.*
 3=look.for wallet by 3

(22)b. *muntu buya dompet nan liy ja.*
 PRG look.for wallet that by 3

3.6 知識 1

彼はいろんなことをよく知っている。【6.6a】

(23) *pəno' de ya=tə' liy ja.*
 many REL 3=know by 3

文(23)は関係詞 *de* が述部の前に現れて名詞句を形成している擬似分裂構文である。*pəno'*などの数量詞が節の最初に現れる場合はこのように擬似分裂構文を取るのが普通である。

私はあの人を知っている。【6.6b】

(24) *ku=tə' si tau nan.*
 1SG=know AST person that

彼はスンバワ語ができる。【6.6c】

(25) *ja tə' si Basa Samawa.*
 3 know AST language Sumbawa

3.7 知識 2

あなたはきのう私が言ったことを覚えていますか？【6.7a】

(26) *mu=tətaŋ ke, apa de ka=ku=krante saperap nan.*
 2SG=remember ITR what REL PST=1SG=talk yesterday that

私は彼の電話番号を忘れてしまった。【6.7b】

(27) *ku=kaluŋa nəməŋ HP ja.*
 1SG=forget number handphone 3

3.8 感情 1 (好悪)

好悪は多くの場合他動詞構文によって表される。(28)aの *sayəŋ*「愛している」は対象を方向格 *ko* で標示する自動詞構文を取っている。「愛情」は感情の中でも3.9で扱う「喜怒哀楽」のカテゴリーに入って

いるようだ。

母は子供たちを深く愛していた。【6.8a】

(28)a. *ina nan sayaj banar ko anak-anak.*
mother that love really to child

(28)b. *tode~tode nan karas benar ya=sayaj lij ina.*
RDP~child that strong really 3=love by mother

私はバナナが好きだ。【6.8b】

(29)a. *ku=bəri' punti'.*
1SG=like banana

(29)b. *ku=bəri' kakan punti'.*
1SG=like eat banana

私は横柄/ケチであることによりあの人が嫌いだ。【6.8c】

(30) *no ku=bəri' tau nan lij sɔmbɔŋ/ ubik.*
NEG 1SG=like person that by arrogant/ stingy

3.9 感情2 (需要)

私はこのバナナが欲しい。【6.9a】

(31) *ku=sate' punti' ta.*
1SG=want banana this

私はこの靴が欲しい。【6.9a】

(32) *ku=sate' sapatu ta.*
1SG=want shoes this

今、その子にはお金が要る。【6.9b】

(33) *muntu pərhu pipis tode nan.*
PRG need money child that

3.10 感情3 喜怒哀楽

このカテゴリーは経験者を自動詞の唯一項とする自動詞構文で表される。感情の対象は方向格 *ko* で示される場合もあれば、共格 *ke'* で示される場合もある。

(私の) 母は (私の) 弟がよくうそをつくのに怒っている。【6.10a】

(34) *ŋamuk ina ko adi səlaki ku lij rɔa bɔla.*
angry mother to younger.sibling male 1SG by like lie

彼は犬が怖い. 【6.10b】

(35)a. *no təŋan kɛ' asu' ja.*
 NEG brave with dog 3

(この文は直訳すると「犬に対しては勇気がない」である.)

(35)b. *kətakit kɛ' asu' ja.*
 scared with dog 3

3.11 関係 1

関係のうち, 所有は他動詞構文で表されるが, 「類似」は自動詞構文で表される. (類似の相手は共格 *ke* によって標示される.) 「含有」は存在動詞 *ada* の構文によって表される.

彼は土地を持っている. 【6.11x】

(36) *ja bæŋ' tana.*
 3 have land

彼は父親に似ている. 【6.11a】

(37)a. *pasan kɛ' bapa ja.*
 look.alike with father 3

(37)b. *bəraso' kɛ' bapa ja.*
 look.alike with father 3

海水は塩分を含んでいる. 【6.11b】

(38) *ada sira paŋ ai' lit.*
 exist salt in water sea

3.12 関係 2

A は B であるという関係はコピュラのない名詞文で表される. 「～になる」という変化は一種のコピュラである *dadi* によって示される. *dadi* は人称接辞が付かない, 共起するいずれの名詞句も常に無標の名詞句として現れるなどの点で通常他動詞とは異なる構文を取る.

私の弟は医者だ. 【6.12a】

(39)a. *adi səlaki kaku dəkter.*
 younger.sibling male 1SG.GEN doctor

(39)b. *dəkter (dadi) adi səlaki ku.*
 doctor (become) younger.sibling male 1SG

私の弟は医者になった. 【6.12b】

(40)a. *adi səlaki kaku dadi dəkter.*
 younger.sibling male 1SG.GEN become doctor

- (40)b. *dadi dɔkter adi səlaki kaku.*
 become doctor youner.sibling male 1SG.GEN

3.13 能力1

「知っている」という意味の他動詞 *tɔ'*, 「手に入れる」という意味の他動詞 *bau'* に由来する助動詞の構文を取る.

彼は車の運転ができる. 【6.13a】

- (41)a. *tɔ' si na bawa mɔbil.*
 know AST 3 bring car

- (41)b. *bau' si na bawa mɔbil.*
 can AST 3 bring car

彼は泳げる 【6.13b】

- (42) *tɔ' si naŋe ja.*
 know AST swim 3

3.14 能力2

「上手である」は副詞 *canti* 「上手に」によって示される。「苦手だ」は他動詞 *beri* 「好きである」の否定形 *no bəri*[NEG like] 「好きではない」によって示されている。ここでは能力の主体を表す3人称代名詞 *nya* が無標の名詞句で現れており, *no bəri*[NEG like]は全体として3.13の可能を表す *tɔ'* や *bau'* のように助動詞として機能しているといえる。例文(44)bは類似の内容を表すためのコンサルタントの作例で副詞 *lao* を用いて「彼は走るととてもゆっくりである」と表現している。

彼は話をするのが上手だ 【6.14a】

- (43) *canti bəkrate na nan.*
 good talk 3 that

彼は走るのが苦手だ 【6.14b】

- (44)a. *no bəri bərari ja.*
 NEG like run 3
- (44)b. *lao bənar lamin bərari ja.*
 slow really if run 3

3.15 移動

移動は自動詞構文（この際移動の対象は場所を示す前置詞句 *paŋ* によって標示される）によって表される場合と他動詞構文によって表される場合がある。この二つの構文の間に意味的違いはほとんどないようである。

彼は学校に着いた【6.15a】

(45)a. *kamɔ̃ dʌpʌt ʒa paŋ səkɔla.*
 already arrive 3 at school

(45)b. *kamɔ̃ dʌpʌt səkɔla ʒa.*
 already arrive school 3

同様の内容を(45)cのように動詞を用いず前置詞句だけで表すことも可能である.

(45)c. *kamɔ̃ paŋ səkɔla ʒa.*
 already at school 3

経由は他動詞 *lempat* 「渡る」を主動詞とする他動詞構文によって表される.

彼は道を渡った／横切った【6.15b】²

(46) *ʒa muntu lempat ɔla.*
 3 PRG cross road

3.16 感覚1

空腹と喉の渇き, はいずれも以下の慣用的な表現によって用いられる. 空腹は文字通りには「お腹が熱い」と訳することができる表現を用いて表される. また「喉が渇いた」を表す *kəmɔan* という動詞は単独では単語として用いられない要素であり, *ai'* 「水」と複合語を形成することによってはじめて「喉が渇いた」という意味を表す.

彼はお腹を空かしている【6.16a】

(47) *panas tian ʒa.*
 hot belly 3

彼は喉が渇いている【6.16b】

(48) *kəmɔan-ai' ʒa.*
 thirsty-water 3

3.17 感覚2

スンバワ語には「寒い」を表す二つの自動詞がある. 例文(49)の *kəniŋin* の構文では経験者あるいはその身体部位を表す語が唯一項として現れるのに対して, 例文(50)の *ŋəlar* の構文では「寒さ」の背景としての時間や場所が唯一項として現れる. 例文(51)はその違いを表すためにコンサルタントが作例した文

² 同様の内容を表す形式として副詞 *ɔla* によって経由を表す以下のような表現もある.

ta ɔla ka=bəlaŋan ʒa.
 this way PST=walk 3

「彼はこの道を渡った」(文字通りの意味「彼はこの経路を歩いた」)

ʒa bəlaŋan ɔla ta.
 3 walk way this

「彼はこの道を渡った」(文字通りの意味「彼はここを歩いて歩いた」)

である.

私は寒い【6.17a】

- (49) *ku=kəniŋin.*
1=feel.cold

今日は寒い【6.17b】

- (50) *ano=ta ŋəlar bənar.*
day=this cold really

この水は冷たい, そのために体に当たると寒く感じるのである.【6.17x】

- (51) *ai' ta ŋəlar; bua lamin kəna pərana ku kəniŋin.*
water this cold reason if get body 1SG feel.cold

同様の対応が「まぶしさ」を表す以下のペア *kesəla'* 「(経験者の) 目がまぶしさを感じる」/ *səla'* 「(光源) がまぶしい」にもみられる.

(その) 陽の光が私の目に眩しい【6.17y】

- (52) *kesəla' mata ku liŋ caya matano nan.*
dazzled eye 1SG by light sun that

陽の光がとても眩しい【6.17z】

- (53) *səla' bənar caya matano.*
dazzling really light sun

2 節で示したように経験者を表す名詞句を唯一項にとる感覚を表す自動詞の多くは *ka-*または *kaN-*を形式の一部として持つ.

上記の例文に示した以外の例には *kaŋompa* 「疲れている」, *kaŋonət* 「気分がよくない」, *kaŋila'* 「恥ずかしい」などがある.

3.18 (社会的) 相互行為 1

社会的相互行為は他動詞構文で表される. 行為の内容は他動詞構文の後に現れる動詞句によって示される.

私は彼 (が服を洗濯するの) を手伝った/助けた【6.18a】

- (54) *ku=tuluŋ ŋa səbersi lamon.*
1SG=help 3 clean clothes

私は彼が物を運ぶのを手伝った【6.18b】

- (55) *ku=tuluŋ ŋa bawa baran nan.*
1SG=help 3 bring thing that

3.19 (社会的) 相互行為 2 (言語行動)

言語行動は動詞によって他動詞構文で表される場合と自動詞構文で表される場合がある. 自動詞構文

を取る場合, 発話の相手を表す要素は方向格 *ko* によって標示される.

私はその理由を彼に聞いた 【6.19a】

(56) *ku=katoan na apa alasan bua ta lok.*
 1SG=ask 3 what reason reason this way

彼は私に私がいつ行くのか聞いた 【6.19x】

(57) *bakatoan na ko aku pidan ku=lalo.*
 ask 3 to 1SG when 1SG=go

私はそのことを彼に話した 【6.19b】

(58)a. *ka=ku=bada na luk dean.*
 PST=1SG=tell 3 way that

私は彼に「この家を持っているのは私だ」と言った 【6.19y】

(58)b. *aku bliŋ ko na ‘aku de baεŋ’ bale ta.’*
 1SG say to 3 1SG REL owner house this

3.20 再帰・相互

私は彼と会った 【6.20a】

(59) *ku=kətamuj ke’ na.*
 1SG=meet with 3

(59)は相互的意味を内在する自動詞の例である. 一般に相互的動作は助動詞 *saliŋ* が主動詞の前に現れる構文で表される.

私は弟と助け合う 【6.20x】

(60) *ku=saliŋ tuloy ke’ adi ku.*
 1SG=RECP help with young.sibling 1SG

再帰的動作は「自身」を表す語 *diri* を項とする以下の形で表される.

私は自分自身を殴った 【6.20y】

(61)a. *ku=pukil diri ku.*
 1SG=hit self 1SG

この文は他動詞の典型構文のうち(1)aに示した述部先行型の構文であるが, 「自身」を表す語 *diri* が項である場合, 対応する(55)bのような動作の対象を表す名詞句が先行するタイプの文は容認されない.

(62)b. **diri ku ku=pukil.*
 self 1SG 1SG=hit

略号一覧

-	morpheme boundary
=	clitic boundary
1,2,3	first, second, third person
AST	assertion
CAUS	causative
ITR	interrogative
NEG	negator
PST	past
PRG	progressive
RDP	reduplication
RECP	reciprocal
REL	relativizer
SG	singular

参考文献

- 風間伸次郎. 2014. テーマ企画：特集 他動性. 東京外国語大学語研論集第 19 号. 33-59.
- 塩原朝子. 2023. スンバワ語の情報構造と名詞述語文. 東京外国語大学語研論集第 27 号. 675-685.
- 高垣敏博. 2014. 語研論集特集「他動性」へのご協力のお願ひ. 東京外国語大学語研論集第 21 号. 60-70.
- Eberhard, David M., Gary F. Simons, and Charles D. Fennig (eds.). 2022. *Ethnologue: Languages of the World. Twenty-fifth edition*. Dallas, Texas: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com>.
- Mahsun. 1999. Variasi dialektal Bahasa Sumbawa: Kajian Dialektologi Diakronis [Dialectal Variation of the Sumbawa Language: A Diachronic Dialectology Study]. Mataram: University of Mataram Unpublished manuscript.
- Shiohara, Asako. 2013. Voice in the Sumbawa Besar Dialect of Sumbawa. *NUSA* 54. 145-158.
- Shiohara, Asako & I Wayan Arka. 2024. Balinese, Sasak, and Sumbawa. Alexander Adelaar and Antoinette Schapper (eds.) *The Oxford Guide to the Malayo-Polynesian Languages of Southeast Asia*. 489-505.

執筆者連絡先：asako@aa.tufs.ac.jp

原稿受理：2023年12月14日